

幼児の躾と道徳教育

吉田昇

(一)

昔の教育ではよく道徳のことがいわれたが、新しい教育では道徳を軽視するので、子供の態度が悪くなつたという非難をよく耳にする。

この考え方は、教育の側に反省を求めるものをもつてけると同時に、父兄の側にも理解の十分でないものがあることを推測させる。

新しい教育は、新しい社会に応ずるために、考え出されたものである。新しい社会は、新しいモラルを求めている。だから、新しい教育が道徳という

ものをぬきにして考えられる筈はないのである。

しかし、これからの社会に必要なモラルは、権威に対する盲目的な服従を中核とするものではあり得ない。民主主義というのは、すべての人々が自主的な立場で互に協力してゆく関係を基本としている。

このようなモラルは、民主主義という言葉を繰返すだけでは出来るものではなく、実際の行為となつて現われるものでなければならぬ。具体的な行為として、定着しなければ、どんな言葉を覚えても、モラルにはならないのである。

だが、現在の状況では、成人の社会において民主主義は、言葉として語られるだけで、具体的な生活の型となつていない。

一つの例を挙げると、私達は昨年、日本教育学会の課題研究として、義務教育終了時の基礎学力を調査した。そのとき基礎学力の中に、数学とか、社会科とかの教科別の学力調査のほかに、社会的態度の調査を加えることにした。それは正しい社会的態度をもつことが、教科の能力に劣らず、義務教育にとつて重要な課題だと考えたためである。

ところが、この社会的態度の調査を行つて見て、他の調査と非常に異つた結果が見出された。それは、他の学科のテストでは、たとえ正答率が低い場合でも、誤答の中のあるものが飛びぬけて多いことはほとんどなかつた。

それであるのに、この社会的態度のテストでは、民主的な態度をいくつかの具体的問題について質問したところ、或る傾向の問題に限つて、テストを製作するときに予測した答とは違つた別の選択肢の方が圧倒的に多いことが起つて来た。

どんな傾向の問題のときに、この現象が起るかという、自分の意見をはつきり言うとか、悪い友人をできるだけよい方に導いて行くといった性質の問題である。これらの問題のときに、自分の意見を強調して恨まれては損だから早く諦めるとか、余りよくない友人とはつき合わないようにするとかいふ答が選ばれる。

民主的な観念を尋ねるテストが、この結果であるから、実際上の行為となるものとつと強度にこの傾向が現われると思わ

れる。しかし、民主的なモラルとしては議論が決定するまでは自分の考えを主張することや、たとえ考えの異なる仲間のもでも自分達のグループとして、可能な範囲で協力してゆくことは、欠くべからざる重要な要素といわなければならぬ。

民主主義がわが国の教育の根本方針とされて、数年間の教育を受けた中学校の最高学年のものが、このような反応を示していることは、成人の社会において古いモラルが強い力をもつていふことを推測させるものであり教育において、新しいモラルをつくりあげることがいかに困難であるかを物語つてゐる。

この困難な仕事について、学校が無關心にいられるはずはない。幼児教育にしても、幼年期が道徳教育の基礎をつくるものである以上、これを無視してはられない。

それ故、新しい教育を行う場合に、幼児教育だからといつて道徳を軽視するよるなことがあつたとすれば、それは教育

を行う者の側が反省しなければならぬことである。

(二)

幼児教育において道徳的な面に重要であるとした場合、その内容がどのようなものになるかについて意見が分れて来る。

昔の社会においては躾ということが一番大切だと考えられていた。この考え方は身分社会の頃から続いている。

静的社会と呼ばれる身分社会では、すべてのものがはつきりした上下関係の秩序をもつていた。先生や両親に対してはどのように挨拶すべきか、目上の人に対してはどのように振舞うべきかというものがきまつて居り、それがいつまでも続くように考えられていた。

事実、社会そのものに変化が少かつたからこの出来上つた型は、一生の間通用し得るものであつた。それ故、幼児の頃からその意味を、幼児が理解しないでも行為の型を仕込んで置けば、後々までも役立つと考えられていた。

評量の上を歩くときにどのようにすべきか、敬語はどのように使うかというようなことまで、幼児が身につけるべき躰と考えられていた。

理解が出来ないのに、その行為を覚えさせるためには、賞罰という方法をとらなければならぬ。正しい型に合った行為をした場合にこれを賞し、その型にはずれたときに罰するという方法が行われて来たのである。

昔風の考え方もつものは、道徳教育という、すぐこの躰を思い浮べる。道徳教育を盛にすることは、賞罰による躰を嚴重にすることだと考えている。

しかし、このような立場だけで幼児の道徳教育を要望するのであれば、これを要望する者の側にも、社会の変化ということについても少し深く考えることを求めなければならぬ。

現代の社会は、静的な社会ではなく、動的な社会と呼ばれている。動的な社会は身分階級の束縛から脱却した社会である。動的な社会は、既に述べたように上

下関係ではなく、平等なもの協力を中心とする社会である。それ故、躰をすることにしても、その内容は昔の社会とは大いに異つたものでなければならぬ。

親や世間一般が、幼児に長上への服従の態度だけを求め、仲間のものとの協力や、平等の態度をつくることを無視するならば、それは新しい社会にとつて好ましいこととはいえない。

更に、重要なことは、動的な社会が不断に変化しつゝある社会であるということに關係している。秩序が動かし難く定まつている社会では、意味がわからないでも、一定の行為の仕方を仕込まれることが役に立つが、変化の激しい社会では意味がわからないで、末梢的な型だけ知つているのでは役に立たない。

人と人との接觸についてでも、極めて多様なものとなつて来るので、その一つ一つについて細かな型を教えて行くことは不可能である。生活様式の変化によつて子供のときに教えた型が、大人の時になると役に立たなくなることも起り得る。

そのため、現代社会では、モラルの教育についても、躰よりも、洞察を重視するようになつて来る。洞察によつて、行為の意味がわかつていけば、新しい事情が生じて、容易にその状況に應ずる行動がとられる。このような、転移し得るモラルの学習が、現代社会では求められている。

洞察による学習は、学習者の情緒が安定しているときに、一番出来易いのであるから、個人的な權威によつて、学習者の自主的な判断を否定する方法は、なるべく避けねばならないと考られている。個人的な立場からの賞罰によつて躰をした場合、児童は賞を得たり罰を避ける手段として、その行為の仕方を覚えるだけなので、教師がついているときだけ、その行為を行い、自由な環境に置かれた場合、モラルの拠りどころを失つてしまふ。

その上、賞罰による不安定を意識するので、すぐに、先生の顔色を窺うようなことになつて、ますますことがら自体の意味を見失うようになる。

それ故、新しい教育では、モラルを与えるにしても、その内容は民主的な社会にふさわしいものであり、その与え方は個人的な權威によるよりも、一般的な原則を主にするものでなければならぬ。

この点は、幼児の道徳教育を要望する場合、父兄もはつきりと認めて置く必要がある。

(三)

道徳教育が洞察を主として行われるとすると、幼児の場合何が内容となるか々問題となつて来る。幼児にとつて初めから複雑な道徳の意味を理解するのは、極めて困難なことといわなければならぬからである。

そのため、幼児の道徳教育は、どうしても自発的な道徳的な判断をさせることよりも、上から与える躰を中心とすることから出発しなければならぬ。だが、躰だけでは、道徳教育という名に価するものではない。たとえ躰を通じて、道徳教育を行うにしても、その躰が将来、人間関係についての正しい洞察を与えるよ

うな性質をもつたものでなければならぬ。

躰を通じて道徳教育を行うことができるといふのは、次のような心理的な発達から考へて見ることも大切である。

子供が、道徳上の善悪を理解する場合先ず悪についての意識が先に立つといわれている。実際の調査にも、小学校の低学年までは、悪について意識することが圧倒的に多く、善について意識することは、それ以後の段階で次第に増加して来る。

この悪の意識は、自然に発生したものであるといふよりは、親や先生が、一定の場合に叱ることが基礎になつて発生して来る小学校の低学年で、どういふことが悪いかといふことを書かせ、その理由をきいて見ると、誰か々叱るといふことが一番多くなつてゐる。

このことから考へると、幼児の頃から叱られていたこと、或は、それをしないことが賞められることが、先ず道徳意識の手がかりをつくり、それによつて、一般的な知能に進むにつれて、その背後に

ある法則的なものを探りあて、遂に品についての概念を得るといふ発達の順序が考へられて来る。この最後の段階に達して、本当の道徳というものが身についたものになる。

それ故、幼児期における躰は、それ自身は十分な意味で道徳教育ではないけれども、道徳教育の基礎をつくることを目標としなければならぬ。

新しい社会にふさわしい幼児教育では躰をそれ自身を完成された型として考へるのではなく、将来の洞察を容易にする素材として考へることが最も強く望まれることとなる。それでは、完成された型として躰を与えるのと、洞察の基礎として躰を行うのと、どこに違いが生ずるのであるか。

それは、実際的には余りに細かなことを教へると、大綱だけを一貫して押えてゆくといふこととの違になるのである。

完成された型として躰を与えようとするときには、細部まで、その型に従うことが要求される。これに反して洞察の基

礎として、躾をするときには、幼児にとつて最も理解し易いもので、しかも社会にとつて最も大切なものをいくつか選んで、それだけを絶えず一貫して行つてゆく仕方をとらなければならぬ。

例えば、公平というような考え方は、幼児にとつても、最も理解し易い人間関係であり、かつ、社会的に考えても極めて重要な態度である。この態度は、特に多数のものが集まつている幼稚園において、最もよく躾ることができる性質のものである。遊具を使うのにかわり番に使うとか、ものを分けるときに平等に分けるとかいうことである。

このことを常に意識して、公平なこと平等なことがよいことで、それに反することが悪いことであるという生活を行わせると、それがかなり早い機会に、人間関係の正しい洞察に移行する。こういったことが幼児の道徳教育なのである。或いは、ひとの邪魔にならないということも大切なことであるが、それを具体的な行為を通じて会得させることも幼稚園の教育にとつて重要である。先生が話

をしているときさわいでいる者がいる。それが邪魔になるときは皆から離れて遠くの方に行くように指示するといった仕方がそれである。

この場合、昔の躾のやり方だと、お行儀ということをやかましく言う。だが、お行儀をよくすることが何故大切であるかは、幼児達には、ほとんど理解されない。そしてこれを強調することは、たゞ先生の言うことには服従しなければならぬという意識を与えるだけになつてしまふ。

そうではなくて、細かい点は言わずにひとの邪魔になるという点だけで押えてゆく。ひとの邪魔にならないようにしさえすれば賞められる。このような仕方にもつてゆけば、子供達の安定感も、損われることが少いし、それについて子供達が洞察を得ることも早くなる。

先生が自己の権威についての侵害として、それを怒るのではなく、民主的な社会の原則を子供のときから育ててゆくという気持で、こういつた躾を行い、その仕方も叱ることよりは、よい点を賞める

ことや、悪いことを悪いとして意識させることに重点をもたせなければならぬ。

道徳教育というのは、このような性格をもつているので、その中にはソリダイクのいう効果の法則のような学習の要素と、ゲシュタルト派の主張する洞察的な要素とがともに含まれて来る。この二つの立場のいずれか一方をとつて、他方を無視するということは、幼児の道徳教育を不当に変形することになる。

この意味で、躾と道徳教育は、相異つた面と、同じ面との二つをもつていゝ。躾を完成した型として考えないで、児童が、それをもとにして洞察を展開する基礎と考えることと、その内容に民主的な社会の基本原則を考えると、これが、これからの幼児教育で最も大切なことと、いうべきであらう。